

# IoTエッジ向けインテグレーションサービスにより、「製品個体識別」と「設備の状況および温度計測」の管理工数を削減し環境負荷を低減 (CO<sub>2</sub>排出量52%削減)

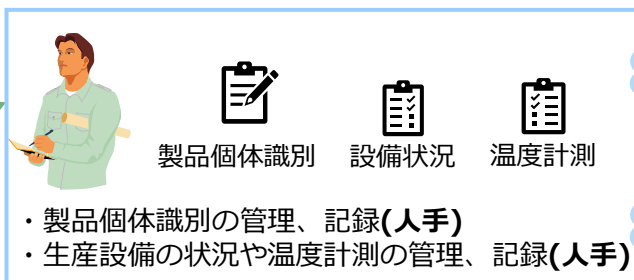
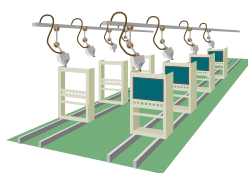
## ■お客さまの課題

- ・生産ライン上の高温製品の個体識別
  - ・生産設備の状況や温度計測
- 作業員の目視や手書きによる管理・記録の効率化

■機能単位：年間1,825,000個の製品個体識別と生産設備の状況および温度計測の管理業務

作業員が製品個体識別管理と生産設備の状況や温度を目視で確認。管理票に記帳する手間を要する

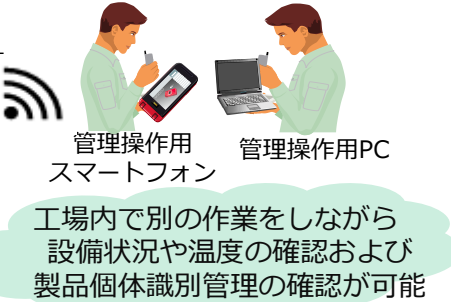
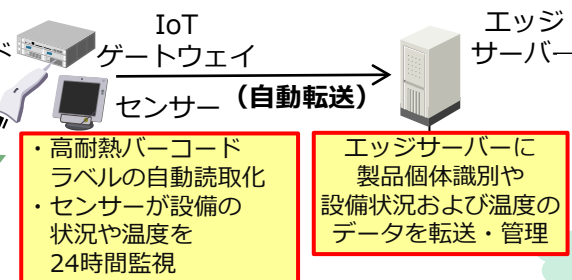
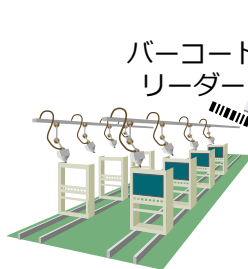
サービス導入前



製品個体識別の管理工数を減らしたい

生産設備の状況や温度計測の管理を自動化したい

サービス導入後



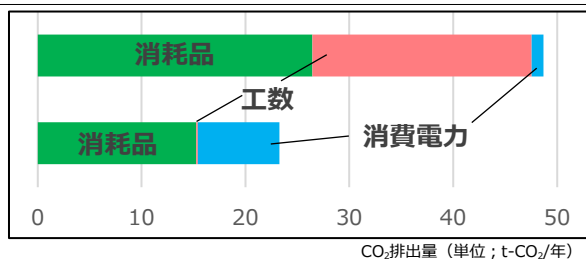
IoTエッジ向けインテグレーションサービスによる製品トレーサビリティ、設備監視モデル

## ■効果

- ・高耐熱バーコードラベルを製品に貼り付け・自動読み取り化したことで、製品個体識別管理の工数削減
- ・センサーとIoTゲートウェイの導入により、生産設備の状況、温度を24時間監視。そのデータをエッジサーバーに自動転送・管理することで、管理工数および消耗品(管理票)を削減

導入前

導入後



CO<sub>2</sub>排出量：25t-CO<sub>2</sub>/年削減 CO<sub>2</sub>削減率：52%

・環境負荷要因の値は評価条件や評価モデルにより異なります。  
 ・本評価は、(株)日立製作所のCO<sub>2</sub>算定手法であるSI-LCA(\*1)を使用し、2022年2月時点の情報で使用ステージを評価対象として算定しています。  
 (\*1) SI-LCA：System Integration-Life Cycle Assessment  
 SI-LCAは「平成17年度情報通信技術(ICT)の環境効率評価ガイドライン(日本環境効率フォーラム平成18年3月発行)に準拠した手法です。

### ● 環境負荷低減要因

- ・製品個体識別管理工数および消耗品(管理票)の削減
- ・生産設備状況や温度計測の管理工数および消耗品(管理票)の削減

### ● 環境負荷増加要因

- ・IT機器使用による消費電力の増加